

えた。

がるものと思われた。

4) 皮膚の血管炎を呈し、脾膿瘍が疑われた多発性動脈炎の1例

武田 康久・川島 崇
本間 智子・佐藤 誠
菊地 正俊・佐藤健比呂
鈴木 栄一・中野 正明
荒川 正昭 (新潟大学第二内科)

下肢の血管炎で発症し、脾膿瘍を疑われた全身性血管炎の1症例を報告する。症例：52歳，男性。1976年より右下肢の無痛性皮疹が出現し，徐々に増悪した。1988年9月，高熱が出現，腹部CTから脾膿瘍が疑われ，抗生剤により改善した。その後も微熱，全身倦怠感，炎症所見が持続したため，1990年3月，当科に入院。肝，脾を各々2横指触知し，四肢に皮疹を認めた。腹部CTでは，脾臓にlow density areaが認められた。左下腿背側の皮膚生検では，全層性血管炎の所見であった。診断の目的も含め，6月29日脾摘出術を行ったが，脾臓の組織では，古い血管炎の所見が認められた。その後，ステロイドによる治療を行い，良好な経過である。

5) 皮膚症状を伴ったシェーグレン症候群の3例

森下美智子・小林 聡也 (新潟市民病院)
河井 伸江 (皮膚科)

症例1：78才女。2ヶ月前より生じた顔面の紅斑を主訴に来院。鼻背，頬部，耳介に環状の浸潤性紅斑が多発。口渇あり。抗核抗体×640，抗SSA抗体×1，抗SSB抗体×4，schirmer's test陽性，Siographyでapple tree像あり。Prednisolon 15mgの内服で皮疹と口渇は改善，以後漸減しTranilastを併用。

症例2：25才女。第1子妊娠中，顔面に紅斑が出現，児は新生児エリテマトーデスであった。抗核抗体×5120，抗SSA抗体×16，抗SSB抗体×16。Siography口唇生検で確診。経過中発熱と共に四肢に圧痛を伴う硬結性紅斑が多発。

症例3：68才女。口唇の鱗屑性紅斑を主訴に来院。外用剤で改善せず。舌も平坦で口渇あり。抗核抗体×10240，抗SSA抗体×64，抗SSB抗体(-)，Rose-Bengal test陽性。

Sjögren症候群は腺外症状として多彩な皮膚症状を伴うことが知られているが皮疹の観察が早期診断につな

第44回新潟癌治療研究会

日時 平成4年2月15日(土)
午後1時より
会場 新潟東映ホテル

I. 一般演題

1) 当科で経験した Acinic Cell Carcinoma の2例

岡田 康男・小沢 一嘉 (日本歯科大学新潟
又賀 泉・加藤 謙治 (歯学部口腔外科学
教室第二講座)

Acinic Cell Carcinomaは，漿液性腺房細胞に類似した類円形ないし多角形の細胞の胞巣状増殖からなる腫瘍で，腺房細胞より発生すると考えられている。本腫瘍のほとんどは耳下腺に発生し，顎下腺，舌下腺，小唾液腺に発生することは稀であるとされている。当科では，1976年より1991年10月までの約15年間に，良性腫瘍38例，悪性腫瘍34例の唾液腺腫瘍72例を経験している。そのうち2例(2.8%)がAcinic Cell Carcinomaであった。今回この2例についてその概要を報告した。性別：2例ともに男性。初診時年齢：56～60歳，平均58歳。発生部位：大唾液腺(顎下腺1，耳下腺1)。病期期間：1～4年。術前検査所見：唾液腺造影，唾液腺センチで腫瘍組織が正常唾液組織を圧排している所見を認めた。治療法：手術+放治，手術+放治+化療。予後：経過良好であり，再発，遠隔転移等の異常は認められない。

2) 顎骨中心性癌が疑われた9例

芳澤 享子・大竹 克也 (新潟大学歯学部)
新垣 晋・中島 民雄 (口腔外科学第一
教室)
朔 敬・福島 祥紘 (同
口腔病理学教室)

口腔癌のほとんどは軟組織から生じるが，極めて稀に転移性ではなく顎骨内に原発するものがあり，顎骨中心性癌と呼ばれている。当科において臨床的に顎骨中心性癌が疑われた9例について，臨床，及び病理組織学的に検討を加えたのでその概要を報告した。年齢は31歳から70歳にわたり，男性7例，女性2例，部位は上顎2例，

下顎7例であった。初診時の症状は、腫脹8例、疼痛7例、知覚障害5例であった。放射線学的には皮質骨の菲薄化を伴った顎骨内部の膨隆が認められたものは4例、広範で虫喰い状の顎骨破壊像は5例に認められた。病理組織学的診断は、扁平上皮癌が8例、癌肉腫が1例であり、口腔粘膜に見られる扁平上皮癌は5例、やや性格の異なる扁平上皮癌は4例であった。病理学的に歯源性上皮の性格をもつもの、放射線学的に皮質骨の菲薄化をともなった顎骨内部の膨隆が見られるものは、顎骨中心性癌であろうと考えられた。

3) 口腔癌に対する neo-adjuvant chemotherapy の検討

—CDDP 投与例について—

星名 秀行・大平 敦郎
 鶴巻 浩・坂井 広也
 森 勝・本岡 悟
 森山万紀子・藤田 一
 大橋 靖
 (新潟大学歯学部
 口腔外科学第二
 教室)

口腔癌に対する CDDP neo-adjuvant chemotherapy について、臨床病理学的に検討し報告した。対象は昭和62年7月から平成3年6月までに治療した口腔扁平上皮癌1次症例17例(50歳から70歳)である。原発部位：下顎歯肉7例、舌5例、上顎歯肉2例、頬粘膜、口底、口咽頭各1例。病期：Ⅲ期7例、Ⅳ期10例、CDDPの投与法は50mg/m²を点滴静注(PEPと併用14例、CDDP単独3例)し、その後、手術(12例)、放射線治療(5例)を施行した。結果：臨床1次効果はPR・8例、NC・9例、奏効率47.1%であった。手術群12例の病理組織学的効果(大星ら)はIVB・1例、IIB・4例、IIA・7例であった。PR群は組織学的にも効果が認められたのに対し、NC群では組織学的にも効果を認めず、これらは初診時生検像で高度悪性癌であった。PR群では再発、腫瘍死1例のみに対し、NC群では再発4例、遠隔転移1例で、現在、胆癌生存2例、腫瘍死2例であり、全例の3年累積生存率は77.4%であった。

4) 早期肺癌の外科治療成績

小池 輝明・寺島 雅範
 滝沢 恒世
 栗田 雄三・木滑 孝一
 横山 晶
 (新潟県立がんセンター
 新潟病院胸部
 外科)
 (同 内科)

1990年末までに切除した肺門部早期肺癌64例と、肺

末梢部早期肺癌88例の計152例の外科治療成績について検討した。肺門部早期肺癌は男性62例、女性2例、肺末梢部早期肺癌は男性56例、女性32例であった。

結果：①組織型は肺門部早期肺癌ではSq:62, Ad:2, 肺末梢部早期肺癌ではAd:71, Sq:12, La:1, Sm:1, Ad-Sq:1, Carcinoid:1であった。②肺門部早期肺癌術後の死亡例は17例で、手術関連死1例を除く16例中9例では術後喀痰細胞診または気管支鏡検査にて腫瘍細胞が検出された。肺末梢部早期肺癌術後死亡例は10例で、肺癌再発または転移4例を含め腫瘍関連死を6例に認めた。③肺門部早期肺癌の3生率86.4%, 5生率76.5%, 10生率63.5%であり、肺末梢部早期肺癌の3生率96.1%, 5生率85.7%, 10生率81.6%であった。

5) ¹⁹²Iridium thin wire による気管支腔内照射の試み

斎藤 真理・樋口 健史
 栗田 雄三・木滑 孝一
 横山 晶
 (県立がんセンター
 新潟病院放射線科)
 (同 内科)

肺癌の集団検診に喀痰細胞診が行なわれるようになり、胸部X線写真無所見で、気管支鏡上ごく早期と思われる所見を呈する肺門型肺癌が発見されることが多くなってきた。このような症例の治療は手術が1st choiceとされるが、呼吸機能が悪く手術の適応外とされる症例も多い。そういった症例には放射線の外照射が行なわれてきたが、外照射では手術例に比し再発例が多くみられる傾向があることから、再発例を減らすこと、呼吸機能を温存することを目的に、不破らの方法を追試する形で¹⁹²Iridium thin wireを用いた気管支腔内照射を91年9月より開始した。胸部X線写真無所見で気管支鏡上所見があり、扁平上皮癌の確診がえられ、低肺機能、重篤疾患の合併などで手術の適応外とされた症例を第一の適応と考え、外照射40Gy/20fおよび腔内照射5Gy/5fを基準線量として照射を試行中である。現在までに12例の登録があり、11例が照射終了、1例が照射施行中である。